

# もつと知りたい ふるさと

64

## 稲荷山城と稲荷山村の誕生

貞慶の侵攻に直ちに対処可能な前線基地として、左岸の要路に城砦の築造を算段した。

### 「城砦の築造と村の誕生」

千曲川西岸の当該地の東側には、旧河道の浸食崖が長く続き、微高地と微低地との比高は、およそ1.5倍位ある。また、西側後背地は氾濫原の湿地帯で洪水の常襲地であったため、川中島5度の合戦の戦さ場にもならなかった。自然堤防上の北端あたり、天当河原に僅か数軒の居住が伝えられている。築造について、

「越後治乱記」に外堀(濠)を造るため、掻き上げをしたとある。防御面と併せて水利による地盤の安定化が図られたと推測できる。

当初は屋代衆の寄騎須崎三河守に下命された。須崎三河守を城主、二之丸小出和泉守、三之丸松田織部正等三将が守将であったと、当地には伝わっている。

天正12年(1584)中には城砦は整ったものと諸記録より窺える。周辺山城の利活用と一体化した兵站基地と言える。

对小笠原備えの最前線の猿



現在の稲荷山城址の碑

ケ馬場衆(留守役250人半)は龍王城に常駐し、佐野山城・小坂城へも番卒を駐在させた。

城砦築造と併せて町割りを行い、近在住民を集め稲荷山村が生まれた。規模的には、現在の横町より北側中町、荒町が該当する。天正11年(1583)五日町裏に鬼門除けとして、小坂浄土屋敷より極楽寺を移した。文禄2年(1593)元町より柳町出口へ高札場を移す。繁栄と共に八日町ができ、南方へ発展する。その後一里山經由の大道が開削され、北国西往還(善光寺街道)ができ、後に宿場が移譲される。

### 「会津転封と其の後」

慶長3年(1598)正月、

上杉景勝は豊臣秀吉より会津・米沢計120万石へ転封を命じられ、同3月には移封が実施され、これにより上杉家の治政16年間は終わる。

※小出家は移らず土着する。

※神官宮本伊豆守吉次は会津へ。 ※松田氏は弟に神官職を預け会津へ従う。

※飯綱社地内の稲荷社は後に米沢館山に移祀、須崎の稲荷として残存。

一旦は犬山城主石川光吉が預かるが、信濃四郡4万石が豊臣秀吉の蔵入地となり田丸直昌が海津城主となりその支配下となる。8月17日秀吉没す。関ヶ原戦役、大坂冬の陣、大坂夏の陣を経て完全なる徳川政権の確立に至る。元和元年(1615)「二国一城令」の



赤い部分は本丸跡地か? (安政年間検地図)

もと廃城となるが、既に前年に館は焼失していた。城跡は、代官見崎喜兵衛が管理していたが、其の後は松木家の占有となり、御除地として後世まで続く。松木家は本陣・庄屋・問屋等を務め、当町役職の中核として君臨した。

NPO法人稲荷山蔵の会

泉 光男

### 参考文献

- 『更級郡、埴科郡人名辞書』
- 『稲荷山四百年の歩み』
- 『花ヶ前盛明編直江兼統のすべて』

